

保育者の保育上特別な支援を必要とする幼児に対する 支援の実態とその関連要因

小林 秀 樹

．問題

現在、養護学校においては自立活動の指導、重複障害児の指導において個別の指導計画が作成され、その活用により、学童期においては支援の継続性が図られつつあると考えられる。しかし、保育上特別な支援を必要とする幼児(以下、支援を必要とする幼児)に対して、幼児期から学童期へと、継続的な支援が実現されていない地域が多い(柴崎,2002)ことや、養護学校は幼稚園・保育所からの引き継ぎが少なく実態把握をゼロからスタートしている(清水,2003)こと等が指摘され、就学前から学童期への継続的な支援が行われているところは少ないと考えられる。個別の教育支援計画の作成等、関係機関の連携による乳幼児期からの継続的な支援が求められている。

幼稚園・保育所においては、統合保育が広く実施され、専門機関との連携も図られつつあるが、現実的なサポートが少なく、支援が保育者の専門性にゆだねられる等まだ十分とはいえない現状にある(大賀・坪井,2000)といえる。一方、養護学校においては、地域の特殊教育センターとしての役割が求められているが、幼稚園・保育所に対する支援の割合が少ない(滝坂,2003)。幼稚園・保育所と養護学校が連携することにより、支援を必要とする幼児に対する支援が充実し、幼児期から学童期へと、継続的な支援が図られると考える。

しかし、支援を必要とする幼児を取り巻く関係機関の相互理解の不足(小西,2004)が指摘され、連携を図るためにはまずそれぞれの機関が互いのことをよく知る必要がある(清水,2003)。養護学校側からの視点として、保育者が支援を必要とする幼児に対してどのような支援を行い、それは何に影響されているのかを明らかにし、幼稚園・保育所の理解を深めることは重要だと考える。

．目的

本研究では、以下の3点について明らかにし、

幼稚園・保育所と養護学校が連携を進めていく上での基礎的知見を得ることを目的とする。

- 1 保育者の、支援を必要とする幼児に対する支援の実態
- 2 保育者の、支援を必要とする幼児に対する意識
- 3 保育者の、支援を必要とする幼児に対する意識や属性が支援を必要とする幼児に対する支援の実態に及ぼす影響

．方法

- 1 対象；新潟県内の 153 の幼稚園と 151 の保育所、計 304 園の保育者
- 2 調査方法；郵送による質問紙調査
- 3 調査内容；フェイスシート、予備調査で作成した支援を必要とする幼児に対する意識を測定する 49 項目、支援を必要とする幼児に対する支援の実態を測定する 45 項目

．結果と考察

幼稚園 91 園、保育所 112 園、計 203 園から回答を得、回収率は 66.8 %であった。197 園 342 名のデータを対象とした。

1 幼稚園・保育所の現状

幼稚園・保育所における支援を必要とする幼児の現状については、73.8 %の幼稚園・保育所が現在在籍していると回答しており、過去に在籍していたと回答した園は 97.5 %であった。支援を必要とする幼児の特徴については、情緒面に支援を必要とする幼児が 50.8 %と半数以上を占めていた。98.5 %の幼稚園・保育所が支援を必要とする幼児の支援のために相談機関と連携をとっており、複数の機関と連携を取っている園が約 85 %となっていた。しかし、特殊教育諸学校と連携している園は13.2%と低い値であった。

2 支援を必要とする幼児に対する支援の実態

因子分析の結果、保育者の支援を必要とする幼児に対する支援の実態として、「個別的配慮」、「職

表1 因子 「個別的配慮」 (=.72)

負荷量	内 容
.606	保育上特別な支援を必要とする幼児が安定できるコーナーや教室を設けている。
.564	保育上特別な支援を必要とする幼児に対し、個別に必要な教材・教具用意(作成)して保育を行っている。
.539	保育上特別な支援を必要とする幼児に対し、個別に保育計画を作成して保育を行っている。
.482	園内研修で保育上特別な支援を必要とする幼児に対するケース会議等を開いている。

表2 因子 「職員の共通理解」 (=.73)

負荷量	内 容
.711	保育上特別な支援を必要とする幼児に対し園の保育方針が設定され、それののつって支援を行なっている。
.663	保育上特別な支援を必要とする幼児に対して十分に観察を行い、ニーズや配慮点等について明確化している。
.486	保育上特別な支援を必要とする幼児の担当者等で会議を持ち、指導方法や配慮点等について話し合っている。
.475	園内研修で保育上特別な支援を必要とする幼児に対するケース会議等を開いている。

員の共通理解」、「就学先との連携」、「専門家からの支援」の4因子が抽出された。このことから、幼稚園・保育所の保育者は、支援を必要とする幼児に対して、職員間の共通理解を図り専門家からの助言を受け、個別的な配慮を行ったり就学先との連携を図ったりしながら支援を行っていることが示唆された。

3 保育者の属性が支援を必要とする幼児に対する支援の実態に及ぼす影響

支援を必要とする幼児に対する支援の実態に、保育者の属性が及ぼす影響を明らかにするために、支援を必要とする幼児に対する支援の実態を基準変数、保育者の属性を説明変数として、数量化 類による分析を行った。その結果、偏相関係数はあまり高くはないが、「個別的配慮」との関連では、数多くの他機関と連携している幼稚園・保育所の保育者が、支援を必要とする幼児に対して個別的配慮を行う傾向にあることが示された。

「職員の共通理解」との関連では、通園施設と連携している幼稚園・保育所の保育者が、職員の共通理解を図る傾向にあることが示された。「就学先との連携」との関連では、幼稚園の保育者が、就学先と連携を行っている傾向にあることが示された。

4 保育者の支援を必要とする幼児に対する意識

因子分析の結果、支援を必要とする幼児に対する意識については、「統合保育に対する肯定的考え」、「社会性・言語能力の肯定的とらえ」、「担任することへの意欲」、「受容的態度」、「担任す

表3 因子 「就学先との連携」 (=.66)

負荷量	内 容
.629	保育上特別な支援を必要とする幼児の就学先に出向き、施設や授業等を見学している。
.620	就学先の担当者や連絡会議等を持って、保育上特別な支援を必要とする幼児について情報交換を行っている。
.575	就学後も、在籍していた保育上特別な支援を必要とする幼児について情報を得ている。

表4 因子 「専門家からの支援」 (=.77)

負荷量	内 容
.846	専門家等を招いて、保育上特別な支援を必要とする幼児に対する保育について、アドバイスを求めている。
.686	専門家等を招いて、保育上特別な支援を必要とする幼児に対して直接指導をしてもらっている。

ることへの自信」の5因子が抽出された。一般的に統合保育に対して肯定的な内容となった。

5 保育者の支援を必要とする幼児に対する意識が支援の実態に及ぼす影響

支援を必要とする幼児に対する意識が支援の実態に及ぼす影響を見るために、支援を必要とする幼児に対する支援の実態を基準変数、支援を必要とする幼児に対する意識を説明変数とし、重回帰分析を行った(表 10)。多重決定係数が高くないが、「個別的配慮」に対しては、「担任することへの意欲」と「受容的態度」の2因子が正の影響を及ぼしていた。

保育者の支援を必要とする幼児を担当したいという意欲と、受容的な態度を持つという意識が、支援を必要とする幼児に対する個別的な配慮を促進させていることが示唆された。

「職員の共通理解」には、「社会性・言語能力の肯定的とらえ」、「担任することへの意欲」、「受容的態度」の3因子が正の影響を及ぼしていた。社会性や言語能力を肯定的にとらえるという意識が共通理解を図ることに影響していることが示唆された。また、保育者の支援を必要とする幼児を担当したいという意欲と、受容的な態度で接していくという意識が、幼稚園・保育所の保育者全体で共通理解を図って支援していくことに影響していることが示唆された。「就学先との連携」は、「社会性・言語能力の肯定的とらえ」が正の影響を及ぼしていた。社会性や言語能力を肯定的に捉えているという保育者が、就学先との連携を図ろうとしているということが示唆された。「専門家からの支援」は、「社会性・言語能力の肯定的とらえ」が負の影響を及ぼしていた。社会性・言語

表5 因子 「統合保育に対する肯定的な考え」(=.83)

負荷量	内 容
.792	保育上特別な支援を必要とする幼児も、普通の幼稚園・保育所で保育する事が一番である。
.636	保育上特別な支援を必要とする幼児に適した保育は、普通の幼稚園・保育所でも充分にできる。
.604	保育上特別な支援を必要とする幼児は、専門機関よりも幼稚園・保育所に入る方が、多くの経験をすることができる。
.596	保育上特別な支援を必要とする幼児は、特別の機関よりも普通の幼稚園・保育所のほうが個性を伸ばすことができる。
.593	幼稚園・保育所でも、保育上特別な支援を必要とする幼児を十分に保育することができる。
.511	保育上特別な支援を必要とする幼児も、特別の事情がない限り、幼稚園・保育所に入った方がよい。
.472	保育上特別な支援を必要とする幼児は、幼稚園・保育所の中でも十分に活動することができる。

表6 因子 「社会性・言語能力の肯定的とらえ」(=.77)

負荷量	内 容
.742	保育上特別な支援を必要とする幼児は、順番を守って遊ぶことができる。
.610	保育上特別な支援を必要とする幼児は、言葉で気持ちを伝えることができる。
.565	保育上特別な支援を必要とする幼児は、お散歩やお昼寝などみんなと同じようにすることができる。
.558	保育上特別な支援を必要とする幼児は、保育者の指示に従うことができる。
.521	保育上特別な支援を必要とする幼児は、場に応じた朝や帰りの挨拶ができる。
.431	保育上特別な支援を必要とする幼児は、積極的に活動することができる。

能力を肯定的にとらえ、他の幼児と同様の発達観を持っている保育者は、支援を必要とする幼児に対して専門的支援をそれほど求めていないと考えられた。

まとめと今後の課題

本研究において、支援を必要とする幼児を支援していくために、幼稚園・保育所と養護学校が連携していくための様々な知見が得られた。今後、幼稚園・保育所と連携を図っていくために、養護学校が行っていかねばならないこととして、以下に示すようなものが挙げられると考える。

軽度発達障害や情緒面の支援についての研修等の実施による専門性の向上

地域のすべての幼稚園・保育所を対象にした、養護学校に対するニーズ調査や、パンフレット配布や訪問等による積極的なセンター的役割の啓発活動の実施

就学先との引継ぎにおける、指導記録や指導計画等を介した情報提供の方法の研修実施や、就学先と幼稚園・保育所とのコーディネート・橋渡し

「個別の指導計画」についての作成・活用の実践経験を活かした、実態把握や長期的・短期的な目標設定、評価等の研修実施

通園施設等幼稚園・保育所が連携している相談

表7 因子 「担任することへの意欲」(=.73)

負荷量	内 容
-.746	なるべくなら、保育上特別な支援を必要とする幼児を受け持つことは遠慮したいという気持ちがある。
.678	自分自身の成長にもつながるので、できれば保育上特別な支援を必要とする幼児を受け持ちたい。

表8 因子 「受容的態度」(=.61)

負荷量	内 容
.652	あなたは、保育上特別な支援を必要とする幼児と話をするとき、優しくおだやかに話すことができる。
.621	あなたは、保育上特別な支援を必要とする幼児をしっかりとしないで、子どもの気持ちを分かってもらうことができる。
.479	あなたは、思うように活動できない子どもでも、大事にすることができる。

表9 因子 「担任することへの自信」(=.61)

負荷量	内 容
-.659	保育上特別な支援を必要とする幼児の保護者の期待に応えられるかどうか自信がない。
-.474	今の自分の能力では、保育上特別な支援を必要とする幼児を受け持ち、保育する自信がない。

表10 重回帰分析結果 (標準偏回帰係数:)

	基 準 変 数			
	個別的配慮	職員の共通理解	就学先との連携	専門家からの支援
統合保育に対する肯定的な考え	.044	-.009	-.012	-.015
社会性・言語能力の肯定的捉え	-.074	.113*	.129*	-.134*
担任することへの意欲	.166**	.189***	.093	.055
受容的態度	.133*	.254***	.072	.026
担任することへの自信	.048	.082	-.036	.069
重相関係数	.237**	.372**	.178	.163

*p < .05 **P < .01 ***P < .001

機関とのネットワーク作りと情報交換の場の設定

幼稚園・保育所を訪問し、実際に支援を必要とする幼児に対して行っている支援の内容をよく理解し、個別の指導計画作成の参考にしたり欄を設け記入する等、その支援をつなげていく意識と方法の検討

なお、今回は、連携を進めていくべきと考えられる幼稚園・保育所と養護学校のうち、養護学校側の視点に立った研究である。これに加えて、さらに幼稚園・保育所側の視点に立った研究を行っていくことが、今後の課題として挙げられる。

文献

- 小西喜朗(2004)乳幼児軽度発達障害児の特徴と支援．講義資料．
- 大賀たえ子・坪井龍彦(2000)養護学校における早期教育相談に関する実践的研究．国立久里浜養護学校教育実践報告,17.
- 柴崎正行(2002)障害のある幼児の保育 - 地域での保育と就学活動 - ．発達遅れと教育,534,4-7．
- 清水貞夫(2003)特別支援教育と障害児教育．クリエイツかもがわ．
- 滝坂信一(2003)盲・聾・養護学校におけるセンター的機能の現状 - 実態調査の結果概要をもとに - ．特別支援教育,9,10-14.